

# 助かろうと思える対話を導く 防災計画の探求

「評者」松田 曜子

正会員 長岡技術科学大学 環境社会基盤工学専攻 准教授



松田 曜子 氏

MATSUDA Yoko

2007年京都大学大学院博士後期課程修了。NPO法人レスキューストックヤード事務局長、関西学院大学災害復興制度研究所特任准教授を経て2016年より現職。震災がつなぐ全国ネットワーク共同代表も務める。

## 対話や言葉への関心

研究者は、しばしば自身の研究分野を一言で説明するように求められる。私の場合、相手に応じて「地域防災」と言ったり、「参加型計画」と言ったりして繕ってきたのだが、正直なところ、いまだに自分自身がしっくりくる表現を見つけれない。しかし、研究者としての歩みをわずかずつでも進める中で、最近おぼろげに見えてきたのは、博士論文で「災害リスクコミュニケーション」を取り上げて以降、土木（防災）計画という行為の中で交わされる、人々の「対話」や「言葉」に一貫して関心を持っていたことだ。その背景には、被災者支援の仕事で災害に遭っ

た人々の生の言葉に繰り返し接する経験をしたことも影響しているのかもしれない。

今、私の本棚を見渡すと、恩師である岡田憲夫先生には、既にそのことを見透かされていたのかもしれないと思う。2007年に学位を取った際、先生から贈られたのが「主語を抹殺した男―評伝三上章―」であった。大学院を出て、防災NPOのスタッフとしてデビューすべく意気揚々としていた私に、なぜ文法学者の評伝なのか：全く訳が分からず、私はその本の最初の数ページをめくっただけで、放置していた。

その後、東日本大震災を経て私は大学に籍を移し、災害復興や防災の取り組みの現場における「専門家」の役割について研究として考えるよう

になった。とりわけ、災害支援を行うNPOの仲間たちが、現場では「ボランティアさん」と呼ばれつつ、明らかに専門知を駆使して支援に当たっており、さらに被災者との対話を重ねながらその専門知を独自に醸成していることを、どのように解釈すべきか探っていた。その頃出会ったのがドナルド・ショーンの省察的実践家としての専門家という見立てである。「省察的実践」は、伝統的な専門家が依拠した「技術的合理性」だけでは、問題の解決はできても新たな問題の設定には寄与できないという限界に気付いたショーンが提案した、新たな専門家像である。省察的実践では、専門家が直面した状況を見直す（省察する）ことで自身の知を更新することができるとされる。

NPOの仲間たちは、被災者と対話することにひととき価値を置いていた。彼らは泥まみれのわが家を前にした人の苦悩や、弱い人ほど助けを求められない避難所の状況から学び、自身の知を見直すことで、浸水した家屋の復旧や避難所運営、地域コミュニティの復興にいたるまで、今の日本に欠かせない「被災地の（わが）」を現在もアップデートさせている。こうした（わが）は、大学や研究機関の中で議論され、パラシュート式に被災地に降りてくる専門知とは異質のものである。

このような経緯を経て、「対話」や「言葉」が私の関心事であると気付いた時、ふと、恩師からはなむけに贈られた冒頭の一冊が再び目に留まった。改めて中を読むと、行為者を表す

「主語」に拘束された現代英語の形式に対し、話者が状況に埋もれているという言語意識から発展した「述語」中心の日本語の構造を体系的に解いた三上文法と、そしてそのことを、当時の大学や国語学会の権威によらず、市井の人々との対話や、新聞記事などの生きた言葉の中から導いた「街の語学者」三上章の生きざまの両方に心打たれた。さらに、三上文法が「わかりやすく役に立つ」という理由で言葉の使い手から評価されている点も見逃してはならないと思った。

## 対話が社会を豊かにする

計画は、それが都市計画であれ防災計画であれ、あるいは、防災の文脈でいえばハザードマップや避難情報などのツールも、その制作過程にどれほどの工学的知見が含まれようと、最終的には市民と共有できるように言葉で語られるものである。ハザードマップは地図という表現を借りているが、災害から生命を守るという使命を果たすには、その読み方に関する説明の言葉が不可欠である。さらに緊急時には、避難情報という言葉で市民の避難

行動を促すが、避難勧告と避難指示の本化にみられるように、この言葉は近年災害のたびに改訂が繰り返されている。まるでプログラムのバグを修正するかのような状況が続いているが、そもそも、避難という応答を導く対話とはどのようなものなのか、生身の人間から学ぶ機会と態度を発信側があまりにも欠いているのではないかとというのが、現在の私の問題意識である。

最近になって、こうした生身の人間同士の対話こそが社会を動かし、豊かにする源泉であるということを再確認させてくれる一冊に出会った。それ

が、デヴィッド・グレーバーの「民主主義の非西洋起源について」である。グレーバーによれば、アテネが民主主義の起源だったというのは西洋人による後付けの説明であり、実際には国家を頼れない場合に互いに与えることから始まる民主主義的实践は、比較的小規模で水平構造を重視するコミュニティの中で即興的に生まれるものだという。

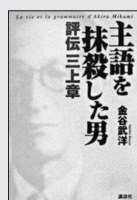
三上は文法において、グレーバーは民主主義について西洋的論理の常識を疑うことから、新たな地平を築いた。さらに、ショーンの省察的实践も加えた三者に通ずるのは、不動で対象

を見下ろす「神の視点」から、対象と場をともにする「虫の視点」への視座の転換ということになるのか。

正確で緻密な情報の投下によって、人々の避難の意思が固まるというのはいわば神の視点を持つ者の幻想であって、実際にはくらしの小さな単位で呼びかけ合わなければ、皆が逃げて助かるうとは思わないだろう。ハザードマップや避難情報はその道具にすぎないのであり、助かるうと思える対話をいかに生み出すかを探索する方に、防災の、また計画の本質があるのだと思う。

(担当編集委員…加藤秀樹)

### 【心の支えとなる一冊】



主語を抹殺した男  
評伝三上章

金谷武洋＝著

講談社 (2006年12月)

外国人に日本語を教える著者が、日本語の構文を完全に説明できる三上の文法にほれ、国語学界の権威から冷遇されながらも自説を唱え続けた三上自身の生きざまを取材し描いた評伝。三上は東大建築学科を卒業し数学を教えながら日本語文法の研究を続けていた。

### 【何度も読み返す一冊】



省察的实践とは何か  
—プロフェッショナルの行為と思考—

ドナルド・A.ショーン＝著  
柳沢昌一、三輪建二＝監訳

鳳書房 (2007年11月)

「行為の中の省察」という専門家の探求プロセスについて、豊富な事例とともに理論構築を試みた大著。ショーンもまた、マサチューセッツ工科大 (MIT) の建築・計画学科で教鞭を執りながら、学習理論について研究を行っていたのは興味深い。

### 【常識を覆された一冊】



民主主義の非西洋起源について  
「あいだ」の空間の民主主義

デヴィッド・グレーバー＝著  
片岡大右＝訳

以文社 (2020年4月)

アナキスト人類学者と称されていたグレーバーが、民主主義はアテネで生まれたのではなく、人々が互いに秩序を保つ仕組みとしてそこかしこで生まれたものだ説く一冊。2020年に急逝した彼もまた、街場の人々から学ぶ姿勢を貫いた研究者であった。